

本多庸一における“Man”概念の研究

—青山学院の指導精神とメソディズムを中心として—

佐々木 竜太

A Study of “Man” Concept in Yoitsu Honda:

On his Educational Policy of Aoyama Gakuin and Methodism

Ryuta SASAKI

1. 問題の所在

本多庸一（嘉永元年～明治45年）は、キリスト教禁止の高札が撤廃される以前の明治5年、23歳で精神的支えをキリスト教に求め受洗し、東奥義塾第2代塾長（明治7年～16年）や青山学院第2代（日本人としては初代）院長（明治23年～40年）、日本メソジスト教会初代監督（明治40年～45年）等といった要職を歴任し、その間「教育と宗教の衝突」事件や「明治32年文部省訓令第十二号」問題などキリスト教主義学校が苦境に立たされた状況において問題の解決に実践的に関わるなど、青山学院、ひいては日本のキリスト教と教育の普及・発展に深く貢献した人物である。

こうしたことから本多は、明治期の日本キリスト教史・思想史研究の通史的文脈において頻繁に登場し、代表的な先行研究としては、氣賀健生による論考¹が挙げられる。氣賀は、本多の「人物の本質に迫ろうとする場合」において、「生涯の歩みに密着することが、恐らく唯一の有効な方法であろう²」という姿勢から、彼の生涯を辿りその実践活動を解説することを通して、「思想と行動の発展過程」を明らかにするという、いわゆる伝記的な著述のスタイルによって本多を語ってきた。そうした研究の一方で、本多のキリスト教観や教育観に焦点を当て、考察を重ねた思想研究はこれまでほとんどみられない。

¹ 主に、青山学院編『本多庸一』（昭和43年・三五堂）、氣賀健生「本多庸一—日本にキリスト教を」キリスト教文化学会編『プロテスタント人物史』（1990年・ヨルダン社）が挙げられるが、その他『青山学報』等においても本多に関する多くの文章を発表している。

² 氣賀健生「本多庸一」キリスト教文化学会編『プロテスタント人物史』（1990年・ヨルダン社）p.237。

その理由としては、本多に関する資料の少なさが第一に挙げられる³。しかしより大きな要因として、本多は著作、論文といった執筆活動を重視するキリスト教思想家ではなく、説教、演説活動に主眼を置いたキリスト教実践家であり、その活動をして「教会政治家」と評される⁴ほど「政治的」側面の強いキリスト者であったとする評価にあると筆者は考える。

その代表的なものとして、武田清子のキリスト教思想史研究が挙げられよう。武田は『土着と背教』（1967年）において、日本におけるキリスト教受容・土着方法を「埋没型」「孤立型」「対決型」「接木型」「背教型」の五つにカテゴリー化し⁵、日本人がキリスト教にかかわる上での「健全な」アプローチは、「対決型」と「接木型」の緊張感をもった結合形態であることを強調したのだが、このキリスト教受容の対極に位置付けられるものとして「埋没型」があり、本多は「本多庸一らのように、征露論などを積極的に唱えたり、」⁶といった文脈において、その代表的人物として取り上げられている。武田が定義するところの「埋没型」キリスト者とは、キリスト教に対する偏見や蔑視の社会的意識、加えて天皇制国家主義の台頭に伴い、思想的部分で対立するキリスト教が非難されている状況をどう打開していくべきか、その指針を探っていく過程で、「キリスト教が世間から非難されるような非国家主義的な宗教ではなく、忠孝倫理とも矛盾するものではなく、日本の国体に適合するものであることを積極的に弁証しようとする」⁷行動をとったキリスト者を指し、この行動に関して武田は、「それは「接木的アプローチ」を志向しながら、伝統的価値の中にいつか足をとられて妥協し、埋没してしまうアプローチ」⁸だと論じ、結論として「埋没型」を「日本への土着の仕方としては挫折」⁹と位置付けた。

日清・日露戦争を是認し推進するような言説や行動¹⁰、キリスト教を「上古の敬神思想を全うする者」¹¹として「日本帝国の国是に副うて往く宗教」¹²であると訴えた本多のそれらの態度をみると、「妥協」の人物という武田の評価もうなずけよう。

しかし本多は、武田が指摘するような「挫折」者であったのだろうか。上述した武田の設定した評価の準拠枠というものは、あるべきキリスト教世界のイメージを基準とし、キリス

³ 本多が自らのキリスト教観、教育観などについて語った史料は極めて少ない。それは、明治34年（本多52歳）、青山の自宅が火災で全焼したためであると考えられる。このことについて、氣賀氏は、「この火災によってかれの説教や演説の草稿はじめ日記・記録類の一切が烏有に帰した。本多の伝記は勿論、日本キリスト教会史にとっての、貴重な史料の数々がこの時失われたのである。」（青山学院編『本多庸一』p.184）と述べている。

⁴ 氣賀健生 1990 p.251。

⁵ 武田清子『土着と背教 - 伝統的エトスとプロテスタント -』（1967年・新教出版社）p.5。

⁶ 同上 p.7。

⁷ 同上。

⁸ 武田清子『背教者の系譜 - 日本人とキリスト教 -』（1973年・岩波書店）p.87。

⁹ 武田清子 1967 p.9。

¹⁰ 本多の主戦論については、伊谷隆一「本多庸一伝」村上一郎他編『ドキュメント日本人4 支配者とその影』（昭和44年・学藝書林）において詳述されている。

¹¹ 青山学院編『本多庸一先生遺稿』（大正7年・日本基督教興文協会）p.143。

¹² 同上 p.125。

ト者をその基準に照らして相対化するというものであるが、武田自身がキリスト者であるということを念頭に入れるならば、ひとつの評価の準拠枠としてそれは設定可能なものではある。しかし筆者（教育史研究者）からすると、そこには、その時代の現実社会を客観的に捉える視点が欠如しているように見え、それが武田の捉え方の限界であると認めざるを得ない。そこで筆者は、本多庸一という人物がキリスト者として具体的に行なったこと、発言したことに着目するといういわば絶対的視点に立って、彼のキリスト教観を捉え直してみたい。

本多は、現実存する問題や課題に対し、主体的かつ積極的に自らを投企する姿勢を生涯持ち続けたキリスト教実践家であり、その実践の背後にある思想的特質を解き明かし、現代的文脈において捉えなおすことは、これまでの日本キリスト教史・思想史研究にひとつの示唆を与えるものになると考える。

こうした研究視座に立つ筆者は、本論文において、青山学院院長であった教育者としての本多庸一に焦点を当て、本多の青山学院における指導精神を導きの糸とし、同校での具体的なキリスト教教育活動、ならびに同校のキリスト教精神の根幹をなすメソディズムに関する本多の解釈を分析考察することを通して、最終的に彼のキリスト教教育観を明らかにすることを目的とする。

2. 青山学院における指導精神

本多は東奥義塾塾長を辞任後、弘前美以教会牧師、仙台美以教会牧師を経て、明治20年9月から一年間、青山学院の前身である東京英和学校校主兼教授、青山美以教会牧師を務めた。そして「宗教教育の視察が目的」¹³で、明治21年9月から23年6月までの間アメリカに留学したのだが、その留学中の明治22年、青山学院教授兼幹事であった松島剛に宛てて書いた手紙に、次のような記述がある。

「日本の各学校各教会よりは色々の人物貴器多く出づべし。神学の新説等は京都又は白金辺より将来何程湧出るやも知るべからずとも、さまで羨むことにはあらず。希くは神の恵により我輩の学校より所謂 Man を出さしめよ Man の資質多くあるべしと雖ども Sincerity, Simplidity (筆者注・Simplicity の誤りと思われる) 最大切なるべし、日本には此種の人将来愈々其必要を感することあるべし。米国の教会右の二質は美会とバプテストに尤も多く見へ Congrigo ション、プレスビテリアン、エписコバル杯には Propriety, Refinement, Seriousness 杯いふ趣きがある様見受け申候。」¹⁴

¹³ 青山学院編『本多庸一先生遺稿』（大正7年・日本基督教興文協会）p.5。

¹⁴ 岡田哲蔵『本多庸一伝』（昭和10年・日独書院）p.87。

「日本の各学校各教会」からは様々な「人物貴器」が世に輩出され、「京都」すなわち同志社、「白金」すなわち明治学院からは、「神学の新説等」が「将来何程湧出る」かしれない。そのことを羨むことはないと主張した本多は、「我輩の学校」である青山学院からは、“Man”を出さなければならないとし、その“Man”には、“Sincerity, Simplicity”という資質が「最大切」であること、この二質を備えた“Man”は将来の日本に必要であることを強調した。さらにこの資質は、キリスト教の教派として「米国の教会」における「美会」すなわちメソジスト派に多く見受けられるものであるとも述べた。

このように本多は、メソジスト派に属する青山学院の教育は、メソジスト派の特質である“Sincerity, Simplicity”を資質として備えた“Man”を育成することであると、非常に端的に且つ奥深い言葉で定義した。氣賀氏はこの言葉を「本多の青山学院長としての指導精神であった」¹⁵と、本多の17年間にわたる教育活動の核心と位置付けている。筆者は、この本多の青山学院における指導精神を彼のキリスト教教育観を明らかにする鍵概念と捉え、本多が定義する“Man”とはどういった人物を指すのかという問題を明らかにするために、まず彼が青山学院院長として行なった具体的な教育活動を考察していく。

3. 青山学院におけるキリスト教教育活動

明治27年に高等普通学部3年科を卒業した黒川新次郎の回顧文には、院長である本多が中心となって進めたキリスト教教育活動の一端が詳細に記されている。

「当時の青山は学問をする学校たると同時に全く精神修養の場所であったと云ひ得る。然してその中心となって居られたのは、何と云っても当年の校長本多庸一先生であったことは申す迄もない処である。其頃の青山学生々活は、頗る忙しいものであった。一面孜々として勉強もするが、他方には、ウキークデーでも随分宗教的会合が多かった。殊に日曜などには、朝は組合があつて、本多先生のお宅か、外国人の先生の所へ行く、終れば長者丸の食堂へ行く。午後は『ガウチャーホール』における学校の教会、之に続いて神学校における英語説教、夜は祈祷会是等に全部出席すれば、平日よりも尚忙しいという有様であった。要するに人物修養の機会は、随時に与へられ、又随所に与へられて居った。」¹⁶

本多は自ら中心となって、自身や外国人宣教師の自宅、教会での説教、祈祷会といった「宗教的会合」を頻繁に行なっていたことから黒川は、青山学院について「学問をする学校」とともに「精神修養の場所」であったという印象を強く抱いている。すなわち本多は、青山学

¹⁵ 青山学院編『本多庸一』（昭和43年・三五堂）p.258。

¹⁶ 黒川新次郎「東京英和学校時代の回顧」『青山学報』（第147号・昭和11年11月30日）p.7。

院において人格的接触を通じた「人物修養の機会」を学生に与えることを重要視していたことが理解できる。

また、内容的に現代の授業要覧に相当する『自明治二十六年至明治二十七年 東京英和学校一覽』によると、本多は院長として学校経営の任に当たった他、予備学部と高等普通学部の学生には「倫理学」を、神学部の学生には「牧会学」を教授した。その『一覽』には、「倫理学」で使用する「倫理用書」が各部、各学年によって以下の通りに示されている。

倫理用書		毎週授業時間
予備学部第一年級	福音講義、信仰之理由等	三
同 第二年級	四福音、証拠論	三
同 第三年級	使徒行伝、真理一斑、基督伝	三
同 第四年級	四福音、マン、チフ、ガリリー、基督ノ姿	三
高等普通学部及師範科 第一年級	聖書書翰、聖書十九世紀	三
同 第二年級	基督教証拠論	三
同 第三年級	教会歴史	三
同 第四年級	聖書、有神論	三

この表をみると、全ての学年において「聖書」をはじめとするキリスト教関連の書を使用していることから本多は、学生にキリスト教の講義を通して「倫理」を教授していたことが理解できる。そしてその具体的方針について本多は、「基督教主義倫理科教授法の一端」と題する講演で次のように述べた。

「由来倫理科は何れの学校に於ても困難であつた。基督教の学校は精神教育を特徴とするも単に聖書を教ふるのみでは適當ではなく、日本の倫理、特にその道德的行為と人物を知らしむるの要あり。基督教を教ふるにも証拠論などを出して徒らに議論するより基督及び聖徒の伝記などにより、模範を示し漸次教義に入るを可とす」¹⁷

「何れの学校に於ても困難」な課題とされる「倫理科」について、「精神教育」を特徴とする「基督教の学校」は、単なる「聖書」の教授のみならず、「道德的行為」と「人物」に主眼を置いた「日本の倫理」を教える必要があると述べた。さらに、「倫理科」で「基督教」を扱

¹⁷ 岡田哲蔵 前掲書 pp.102-103。

う際は、「基督」や「聖徒」の「伝記」を通して彼らの人格、行ないを「模範」とした上で、教義を教授するべきであるとの方針も示した。続けて本多は、「実践を主眼として誠意を以て指導」すれば、「無効などいふことなし」と述べ、「倫理科教授」における「実践」的姿勢の重要性を説いた。

このように本多は、青山学院という「基督教の学校」において、人格的接触を重んじて「随時」かつ「随所」に「宗教的会合」を行い、また「道徳的行為」や「人物」を中心とした「日本の倫理」を重要視し、「基督」や「聖徒」の「伝記」で「模範」を示すことを基礎に据えた「基督教」を内容とした「倫理学」を教授することによって、青山学院における教育の核心として掲げた“Man”を育成したのであった。

4. 本多のメソディズム

次に、本多が“Man”が備えなくてはならない資質として掲げた“Sincerity, Simplicity”について考察していくが、本多はこの二質をメソジスト派に多く見受けられるものであるとしていることから、本多がメソジストという教派をどのように理解していたのかという自身のメソジスト観、すなわち本多のメソディズムを明らかにすることを手段として導き出したいと考える¹⁸。

本多のメソディズムに関する思想的考察に入る前に、まず本多がメソジスト派に所属することになった経緯と、それからの活動について歴史的に辿ってみることとする。

4-1. 人格的感化による転属から教派的意識の形成へ

本多は、明治5(1872)年5月にバラ(J.H.Ballagh)より洗礼を受け、「超教派主義」を標榜した「日本基督公会」に所属した。そして弘前に帰郷した翌年の明治8年、本多は「日本基督公会」からの分離独立という形で「弘前公会」を設立し、宣教師ジョン・イング(John Ing)と共に、「超教派主義」としての教会運営、伝道活動を行なった。

しかし、教派問題から合同組織としての「日本基督公会」は結果として成立しなかったため、明治9年12月、「弘前公会」は所属教派に関する会議の結果、バラの流れを汲む「日

¹⁸ 本多のメソディズムに着目した研究として、藤代泰三「本多庸一とウェスレー『キリスト者の完全』」『キリスト教社会問題研究14・15号』(同志社大学人文科学研究所・昭和44年)が挙げられる。藤代は、本多の「信仰と思想のなかに、メソジスト教会の創始者ジョン・ウェスレーの影響がいかに現われているか」を明らかにすることを目的とし、本多の説教集『本多庸一先生遺稿』と「ウェスレーの最も重要な神学書」である『キリスト者の完全』に表れている思想を、いくつかのキーワードに沿って比較検討した結果、本多を「真のメソジスト教徒であった」と結論付けた。藤代は、本多のキリスト教思想を形成する要因としてメソディズムに着目したものの、その考察は本多とウェスレーの言説上での類似点を列挙した比較検討にとどまり、本多がウェスレーについて、そしてメソジストという教派について、具体的にどのように語り、理解していたのかという問題にまで踏み込んだものではなかった。

本基督一致教会」ではなく、イングの所属する「アメリカ・メソジスト監督教会」に所属し「弘前美以美教会」となった。それに伴い、本多をはじめとする「弘前公会」の会員はメソジスト派に転属したのである。この本多の転属について岡田哲蔵は、「本多は其時両派の信条を比較して何れを採るかという如き態度で無かつたろう。寧ろイングの人物に傾倒して心を惹かれたと見ゆる。」¹⁹と述べており、この時の本多のメソジスト派への転属は、メソジストの教派的特質への評価というよりは、イングの人格的感化によるものであったといえよう。

その後本多は、明治12年にアメリカ・メソジスト監督教会監督のワイレー (Wiley, I.W) から執事の按手札を、16年には長老の按手札を受け、弘前美以教会牧師 (明治11年～19年)、仙台美以教会牧師 (明治19年から20年) を歴任したが、この期間メソジスト派などの教派に関して言及した説教、演説等は見られないことから、キリスト者として教派という問題に対する意識は低かったものと考えられる。

本多がメソジストという教派の持つ特質を意識し、積極的に評価し始めるのは、明治22年のアメリカ遊学時に宗教家・教育家に専念することを決断した41歳の頃であった。「メソジスト派の有力なる神学校」²⁰であるドルー神学校 (Drew Theological Seminary) にて、本多は約半年間にわたり神学を学んだがその間、青山学院教授兼幹事であった松島剛に宛てて書いた手紙に次のような記述がある。

「庸一は宗派心の乏しき誇りを蒙るものなり。然れども米国の現場を見れば美以教会の爲めに誇らざるを得ず。美会にはウェスレーの火未だ滅せず伝道精神此教会より盛なるものなし」²¹

「宗派心」すなわち、教派的関心がなく「誇り」さえ受けていたという本多は、「米国の現場」においてみた、ジョン・ウェスレーの精神が受け継がれた「伝道」の盛んな「美以教会」に大きな「誇り」を得たのであった。明治23年6月に帰国した本多は、その年の「日本美以教会第七年会」において、「是迄は己の方法に由って伝道して来ましたが、今よりは己の方法を棄て、全く教会の方法に由って主に忠義を尽します。」²²と述べていることから、アメリカで芽生えた教派的意識の影響が大きいものであったことが看取される。

帰国と同時にメソジスト派の青山学院院長に就任し17年間その職を務め、またメソジスト三派の合同運動に尽力し、明治40年の三派合同によって成った「日本メソジスト教会」では初代監督を務め、監督就任から半年間での「北海道から沖縄、韓国にまで及んだ前後

¹⁹ 岡田 前掲書 p.57。

²⁰ 岡田 前掲書 p.85。

²¹ 岡田 前掲書 p.86。

²² 青山学院編『本多庸一先生遺稿』(大正7年・日本基督教興文協会) p.6。

十一回の伝道旅行は「合計一九、五八六キロ」に及ぶものであった²³ ことなど、アメリカ帰国後の本多は、ジョン・ウェスレーの「世界はわが教区なり」という精神を自ら実践したという意味において、まさに名実共にメソジスト派キリスト者であったといえる。

4-2. 「第二の回心」＝「新生」による「メソヂスト教会」の「誕生」

では、メソジスト派のキリスト者として教派性を意識したキリスト教実践活動を行った本多は、その実践活動を支える思想的レベルにおいては、メソジストという教派をどのように捉えていたのだろうか。本多が、メソジスト運動の指導者であったジョン・ウェスレーについて語った説教を読み解いてみたい。

「ウェスレー生誕二百年紀年号」と題して企画された『護教』第622号（明治36年6月27日）に本多は、「ウェスレー師の新生に就て」と題した論考を寄せた。本多は、ウェスレーの生涯において最も大きな転換点となった一事として、ウェスレーがアルダスゲイト街で行われたモラヴィア派の集会において経験したいわゆる「第二の回心」と呼ばれる出来事に注目した。本多はウェスレーの日記を中心にその回心に至るまでの状況を丁寧に辿り、「学識高遠伝道並教育等の経験稍豊富」であったが「信仰の状態」は「父の家に生れたる嬰兒のごとし」という回心前の状況から、アルダスゲイト街での集会によりウェスレーは「新生」し、「真の生ける信仰」を得たのであったということを強調した²⁴。「第二の回心」以降のウェスレーを「新生」と位置づけ、それまでの高教会主義的な立場から、福音主義的信仰を抱くようになったウェスレーのキリスト教信仰を重要視した本多は、「新生なかりしならばメソヂスト教会の誕生を見ざりしならん」²⁵と、その「新生」による「第二の回心」をもって「メソヂスト教会の誕生」とした。

こうした「新生」後のウェスレーを積極的に受け入れた本多の言説は、「偉人の母」と題した説教（『護教』第625号・明治36年7月18日）にも見られる。「新生の経験」を経て福音主義的立場へと移行した兄・ジョンに対し、依然高教会主義的な立場にあったサムエル、チャールズの兄弟は、炭鉱労働者らを中心とした民衆に向けて、教会外で路傍説教を行うことに「反対」したが、スザンナだけは、ジョンの実践に「同意」し、「奨励」した事実を紹介した本多は、「新生」後の福音主義的キリスト教活動を支える人物がいなかったら、「偉人」としてのジョンや今日にまで至るメソジスト教会は存在しないという意味から本多は、「スザンナ・ウェスレー女史は只にウェスレー家の母たりしのみならず、現在七百六十六万余人の母たるなり。」と述べ、スザンナの果たした役割を評価した²⁶。

このように本多がウェスレーを理解する上で、福音主義的信仰を強調した「第二の回心」

²³ 青山学院編『本多庸一』（昭和43年・青山学院）pp.265-266。

²⁴ 『護教』（622号・明治36年6月27日）p.11。

²⁵ 『護教』（622号・明治36年6月27日）p.11。

²⁶ 『護教』（625号・明治36年7月18日）pp.3-4。

を重要視していたことは注目に値する。こうしたウェスレー理解を基盤に本多は、メソジストの教派的特質をどのように捉え、そして人々にどのように伝えたのだろうか。

4-3. 「何事でもすると云ふ勇氣」を抱いた「平民的」な精神性

本多は、メソジスト教会の教職に就くものに対して「指導者の心得」と題する説教（『護教』923号・明治42年4月3日）を行った。「神の旨を奉じて指導者たるものは如何なる態度を執るべきか、之は他の方法を考ふるよりも基督の指導に従はねばならぬ、基督は世を導くに如何になされたか」という問いを投げかけた本多は、その答えとして、キリストは「人に役はるゝ、為に來た」ことから、我々もまた「人に事へて導く」方法をとらなければならないと指導者に訴えた²⁷。そして「人に事へて導く」ことにおいて本多は、「日本メソヂスト教会制定の条例第五十七条八則」の『『罪惡の外何事をも恥る勿れ』』という精神性を重要視し、次のように述べた。

「人を救ひ世を救ひ神の御用を務むる場合に如何に卑く困難な生活であっても神の為め人を救ふ為めなれば恥づるに及ばぬ、之がウェスレーの精神である」²⁸（傍線ママ）

「道德に反する事がなければ何事でもすると云ふ勇氣が欲しい、基督は如何なる事をも恥ぢず恐れ給はなかつた、基督の僕は基督の主義を奉ずると共に基督の態度を学んでゆきたい、如何なる事でも人の為になることならば実行するが必要である。」²⁹

「罪惡の外」すなわち「道德に反する事」がなければ、どんなに「卑く困難な生活」であっても恥じることなく「何事でもすると云ふ勇氣」を抱き、実行することが「ウェスレーの精神」であると本多は強調した。そして、メソジスト派がこうした精神性を備えている背景にある、その「慣習」について次のように述べた。

「西洋に往けば教派に由りて慣習が違ふがメソヂスト教会は比較的平民的である、之は宜しきことである、我々も単独に謙遜に平民的でありたいと存じます。」³⁰

「メソヂスト教会」の「慣習」、すなわちその特徴を「平民的」とすると本多は解釈した。この解釈は、先述した、本多が福音主義的信仰の立場をとった「新生」後のウェスレーに価値を見出していたことに大きく関係しているといえ、非常に興味深いものである。なぜならば、「新生」後のウェスレーが教会を離れた街頭において民衆、とりわけ労働者達に対して

²⁷ 『護教』（923号・明治42年4月3日）p.2。

²⁸ 同上。

²⁹ 『護教』（923号・明治42年4月3日）p.3。

³⁰ 『護教』（923号・明治42年4月3日）p.2。

説教を行ったことを本多が重要視したからこそ、メソジストの教派的特質を「平民的」であると評したといえるからである。

「平民的」であるとするメソジストの教派的特質について、本多は別の文脈において具体的に述べている。

「美会の牧師には才子達人多しと云ひがたし、然れども赤子の如き信仰を有して居る人他教会に比して大に勝る処なるは著明なり。仮令ば律義なる武士の如し左まで功あるにあらねど死場を外さぬと云う趣あり、我日本は今日未だ諸教会格別相違なし好すべし。然れども早晚欧米本山の気風を移すこと免るべからず、今既に其徴あり我輩も其流行を免る能はざるべし。さらば矢張美以たるべし、質直にして能く進み恭謙にして能く下り勉めて下級の伝道を励み高きを低くするよりも寧ろ低きを高くするの方針を取らん。」³¹

これは、前掲したアメリカのメソジスト教会に触れたときの印象を松島に伝えた手紙の一部である。ここで本多は、「美会の牧師」には「才子達人」すなわち才知に優れた人物は多くないが、「赤子の如き信仰」といういわば純粋な信仰を抱いている人物が多いことを挙げた。そして総じてメソジスト派は「質直」かつ「恭謙」な品性をもち、「低きを高くする」という方針の「下級の伝道」に励むことを特徴として掲げ、今後「諸教会の相違」が生じてくる「流行」の中で、メソジスト派の特徴を強調したのであった。

以上の考察から、“Man”が備えるべき“Sincerity, Simplicity”の二資質は、ウェスレーが「第二の回心」後、労働者らを相手に路傍説教をしたように、「何事でもすると云う勇氣」を抱き、「実行」とするという「平民的」な精神、さらにいえば「質直」かつ「恭謙」な精神であると理解できる。

こうした自身のメソジスト理解を基盤として青山学院の指導精神を表したその思想的背景を探るため、本多が説教を通して語ったキリスト教教育観を考察し、“Man”の具体像に迫っていきたい。

5. 本多の「基督主義」教育論

本多は「教育の二大目的」、「基督主義教育の必要」と題する説教（両説教とも日時・場所不明）において、自身のキリスト教教育観について語っているが、「教育の二大目的」として、「一、善き人間を作ること 二、善き国民を作ること」³²を挙げ、目的達成のために次の

³¹ 岡田 前掲書 p.86。

³² 青山学院編『本多庸一先生遺稿』（大正7年・日本基督教興文協会）p.195。

ような主張をした。

「善き国民は国力の大原素なり。」³³

「善き国民は善き人間たるを要す。故に徳育最も必要なり。而して徳育は宗教を要す。」³⁴

「国力の大原素」となる「善き国民」は、「善き人間」でなければならない。そのためには「徳育」が最も必要であり、その「徳育」には「宗教」が必要である。こうした論理で、本多は「教育の二大目的」達成のために、宗教教育が必要であることを訴えた。では、数ある宗教の中でもなぜ「基督主義」の教育を必要としたのであろうか。本多は「他教の主義を尋ねて論究する之違はなし。直裁に我所謂基督主義を概述して日本の必要に及ばん。」³⁵とし、「基督主義」について論じ進める中で、その教育の必要性を明らかにしようとした。本多は、自身が定義する「基督主義」を次のように述べた。

「基督は積極に消極に高貴なる教訓を施されしも、帰する所は力を尽して天父の意思を行ひ、己の如く隣人を愛するを以て中心とす。縮言すれば克己献身他の為に生死する事なり。此の献身を徳の理想として倫理道德を立つるは、基督の倫理、主義なるを信ず。以上は或人の意に合ふも合はざるも吾人が基督主義と信ずる所なり。」³⁶

キリスト教の「中心」は、キリストが説いた「高貴なる教訓」ではなく、「力を尽して天父の意思を行ひ、己の如く隣人を愛する」という「克己献身」であると本多は捉えた。この「克己献身」を「徳の理想」とすることが、「人の意に合ふも合はざるも」本多が定義するところの「基督主義」であり、本多が「基督主義教育と称する者」³⁷は、「基督主義」を「造次も顛沛忘るゝことなくして教育を実行」³⁸することであった。

注目すべき点は、本多が、基督教主義という一般的に使われる語ではなく、「基督主義」という言葉を用いていることである。本多は、「基督教主義と云はざるは微意あるなり。」³⁹と述べていることから、筆者は、本多が定義する「基督主義」には、彼自身のキリスト教解釈が表れているのではないかと推察する。本多の「基督主義」教育観をより明らかにするため、次に本多のキリスト教観を考察していく。

³³ 青山学院編『本多庸一先生遺稿』（大正7年・日本基督教興文協会）p.195。

³⁴ 同上 p.196。

³⁵ 同上 p.192。

³⁶ 同上 pp.192-193。

³⁷ 同上 p.193。

³⁸ 同上 p.193。

³⁹ 同上 p.192。

6. 本多の「基督主義」教育観における「実験」概念

本多は「基督教三易」（明治24年・箱根）と題する一般市民への説教において、「基督教は何ぞ」と問う人に、「基督なり」と答えた。なぜならば、「基督教は基督の言行動作より成立つものにて、（中略）其の人の生涯が即ち其の道である教である」⁴⁰からであり、それはキリストが行なったように我々もまた行なうことで「基督教」の真理が得られるという解釈からの定義であった。また説教「献身」（明治42年10月）において本多は、「基督の心を知る」というキリスト教理解の問題について次のように語った。

「基督の心を知るは神学ではない。聖書を百千遍読んでも無益である。祈祷も大切であるが、祈祷することでもない。基督と共に働くこと、十字架を負ひ自己を棄てることである。父の御心に従ひて克己献身する間に、何時の間にか父の御心が解つて来る。宗教は実験である、基督の心も実際に知らねばならぬ。」⁴¹

本多にとって「基督の心を知る」ことは、「聖書を百千遍」読むことや「祈祷」することではなかった。本多は「基督と共に働くこと」を通して、すなわち「実験」することによって知ることができるのであると強調した。

明治学院院長を務めた井深梶之助は、本多について「君は専門の神学者でもなければ、又専門の聖書学者でもありませんでした。然しながら実験的信仰の根柢^{マツ}の極めて深い熱烈なる人でありました。」⁴²と、本多を「実験的信仰」者と評しているように、彼が主張した「実験」とは、彼のキリスト教信仰の特質を表す概念であると位置づけることができる。本多が、基督教主義教育という一般的に使われる語ではなく、「基督主義」教育という言葉を用いて「教育を実行」する重要性を示した思想的背景には、聖書を読むことや祈祷するという「教」としてのキリスト教よりも、現実的課題に対して積極的、主体的に関わるという「基督と共に働く」姿勢を重要視する、「実験」概念が存していたと解釈できる。

さらに本多は、キリスト教各教派の合同問題に関する見解の中で、「将来日本に各派の合同があるときはメソジスト派は実験的宗教を貢献したいと思ふ。」と語り、「メソジスト派の特徴は実験的信仰」⁴³であると強調した。

したがって本多は、キリスト教理解においてメソジストという教派の特質を最も重要視したキリスト者であり、多くの実践活動の背景には、こうした「実験」というメソジストの特徴を捉えた概念が根柢に存していたのである。これまでの考察を振り返ってみると、本多がメソジスト派の青山学院において、キリスト教の教義よりも「基督」や「聖徒」の行ないを

⁴⁰ 青山学院編『本多庸一先生遺稿』（大正7年・日本基督教興文協会）p.10。

⁴¹ 同上 p.44。

⁴² 『護教』（1080号・明治45年4月12日）p.2。

⁴³ 『護教』（1004号・明治43年10月22日）p.11。

重視した講義を行なった点や、「倫理学」の教授において実践的姿勢を重要視した点、現実
に起きた問題に対し積極的に関わった姿勢に本多のメソジズムが表れているといえ、また
「宗教的会合」を盛んに設けた背景には、イングの人格的感化が要因となってメソジスト派
へ転属した本多が、自らも人格的接触を重んじ、人格的感化によって“Man”を育成しよ
うという、メソジストの特徴が表れているといえよう。

7. 結論

ここで、本論文の目的である本多のキリスト教教育観を明らかにするための導きの糸とし
て示した、本多の青山学院における指導精神にもう一度視点を移してみたい。本多がそこで
掲げた目標、すなわち本多のキリスト教教育観を表す概念である“Man”とは、“Sincerity,
Simplicity”という、「質直」かつ「恭謙」な「平民的」精神を持ち合わせ、「基督と共に働
く」という「実験」を実践していく人物であると捉えていたと結論付けることができる。

青山学院というメソジスト派に属する教育機関として、その特質を踏まえた方法により、
メソジスト派に特徴的な資質を備えた学生を輩出することを目的として指導精神を掲げて教
育活動をした青山学院院長としての本多の実践、またメソジストの教派的特質を把握し、「実
験」として自身のキリスト教観の根幹に位置づけ、現実に存する問題や課題に主体的かつ積
極的に自らを投企し、その解決に向けて尽力した本多のキリスト教実践は、まさに自ら
“Man”概念を体現化したものであったと考えられるのである。

【参考文献】

- ・青山学院編『本多庸一先生遺稿』（大正7年・日本基督教興文協会）。
- ・岡田哲蔵『本多庸一伝』（昭和10年・日独書院）。
- ・青山学院編『本多庸一』（昭和43年・青山学院）。
- ・藤代泰三「本多庸一とウェスレー『キリスト者の完全』」
『キリスト教社会問題研究 14・15号』（同志社大学人文科学研究所・昭和44年）。
- ・氣賀健生「本多庸一ー日本にキリスト教を」キリスト教文化学会編『プロテスタント人物史 近代日本の
文化形成』（1990年・ヨルダン社）。
- ・『護教』。
- ・『青山学報』。
- ・青山学院編『青山学院五十年史』（昭和7年・青山学院）。
- ・青山学院編『青山学院九十年史』（昭和40年・青山学院）。
- ・武田清子『土着と背教』（1967年・新教出版社）。
- ・武田清子『背教者の系譜』（1973年・岩波書店）。
- ・キリスト教学校教育同盟編『日本キリスト教教育史・人物編』（昭和52年・創文社）。
- ・大木英二『弘前教会百年小史』（1983年・日本キリスト教団弘前教会）。
- ・同志社大学人文科学研究所編『日本プロテスタント諸教派史の研究』（1997年・教文館）。
- ・高橋昌朗『明治のキリスト教』（2003年・吉川弘文館）。
- ・野呂芳男『ジョン・ウェスレー』（2005年・松鶴亭（出版部））。